

アジアを 読む

8

SARSと華人コミュニティ

告や追悼広告が多く寄せられたことを覚えていた。同一民族間のネットワークが同時に世界的規模で共振するようになることは、華人組織以外ではまず考えられない。

SARSの感染者はアジア太平洋地域、欧米、アフリカまで広がったものの、その圧倒的多数は華人で占める。華人以外の感染者数ははつきりしないが、医療関係者を除くとごく少数とみられる。

前回のこの欄でも触れたが、SARSは華人地域間の人の移動で広がり、飛び火先の華人社会で深刻な連鎖感染を招いた。華僑三宝にみられるような、華人社会の人間の結びつきが感染者を「華人」にほぼ囲い込んだのではないだろうか。

シンガポールでSARS患者が発生したとき、真先に懸念したのは隣国のマレーシア、インドネシアに拡大しないかという点だった。マレーシアは東南アジアのへそに当たり、もし感染者が増えれば陸続きでインドシナ半島内陸部に拡散しかねない。インドネシアは人口大国でその影響は計り知れない。さらに両国ではマレー人イスラム教徒、マレーシアはイスラム国家が圧倒的に多いが、華人も相当な数を占める。華人国家のシンガポールを中継点にマレー人主体の

イスラム国家に感染が広がれば、ただでさえ微妙なパランスの上に立っている「社会調和」、さらには東南アジアの国際関係が揺らぎかねない。

現に5月には、シンガポール側が感染を疑われたシンガポール在住のマレーシア人を本国に送還したとして、小競り合いが起きた。シンガポールがSARSを輸出したと批判する声がマレーシア内で起き、一時は関係が悪化しそうな雲行きだった。

マレーシアではSARSによる死者が二人(華人)出たが、幸いにも深刻な事態にならなかった。関係国の防疫体制の強化もあろうが、華人コミュニティの独立性が他民族社会への感染を遮断する役割を果たしたのではないか。特にマレーシアでは、華人とマレー社会は生活文化面で重なり合う部分は小さい。国をまとめていくうえで政権を悩ませてきた、民族間の溝が、逆にSARSでは幸いしたとは言えないだろうか。

SARS禍が深刻だった地域で日本人に感染者が出ていない(5月末現在)理由について、さまざまな見方がある。生活習慣の違いに結びつける議論が多いのだが、理由はやはり日本人社会を含む民族別コミュニティのあり方と関係しているのではないか。

(日経香港社 奥村幸広)

中国の人は数字を折り込んだ熟語や造語を編み出す達人である。古くからある、文房四宝(筆、墨、硯、紙)などのことばのほかに、最近では江沢民前総書記が提唱した、三個代表理論」という表現も登場した。華僑・華人の世界には「華僑三宝」という言い方がある。

華僑が、落地生根へ旅先の地に住みつく(の)先で組織した総商会、同郷会などの「僑団」、子弟教育のための「僑校」、それに華人社会向けの新聞である「僑紙」の三つをさす。四海為家とする第一世代華僑は、「華僑三宝」を求心力に、「落葉帰根へ故郷へ戻る(こと)を夢見てきた。華僑三宝」が世界での華人コミュニティづくりの基盤となった。

新型コロナウイルス(SARS)のことである。中

国、香港、台湾、シンガポールの華人国家・地域に大きな被害をもたらした。同胞の難局に世界の華人組織がどう反応するか注視していたら、感染地域への義援金寄付のほかに、華字紙を通じて激励などを呼びかける声が相次いだ。

主要華字紙を数日間チェックしただけでも、例えば世界東莞社団總會、江蘇同郷会、各地の中華総商会の激励広告などをみることができた。「僑団」「僑紙」が募金活動、連帯の表明などで大いに機能したようだ。

こうした光景は濃淡こそあれ、特に中国で大災害などの異変が起きたときにはよく見受けられる。89年の天安門事件、97年の鄧小平氏の死去の際も、華字紙に世界の華人団体の意見広